
青いビー玉

彼方 ちさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青いビー玉

【Nコード】

N0422J

【作者名】

彼方 ちさ

【あらすじ】

1945年夏。戦争中の少年達に訪れた、女の子との物語

(前書き)

前回別名で出していた分の修正版です。

いつの日か、お父ちゃんは言った。

この世の生き物は、みんな一つの綺麗な青い星の上に立っているんだよ

僕はおかしいわ、と言った。

青いのは足元ではなく、むしろ頭の上の空の色やろっ。

僕がそういうと、お父ちゃんは愉快そうに笑った。

そうか、お前はまだそんなことも知らないのか

そう言っつてバカにした様に泣きながら笑った。

そんなことも知らないのに、俺はお前を置いていかないといけなののか

そう言っつて泣いた。

「かつちゃん、なにしてるんや？」

後ろから声をかけられて僕は答えた。

「ビー玉や、青くて光つとる。珍しいやろ」

僕の親指と人差し指の間には直径3センチ程のガラス玉が、輝いていた。

へーと、こつちゃんが覗きこむ。でも、あれやなあ。と僕に言った。

「そんなん、大事にしとるの、なんか・・・」

「女の子みたいやわあ。」

いきなり会話に加わった高い声に、僕もこうちゃんもギョツとした。ふふつと笑うとお下げが揺れる。大きな黒い目がビー玉に負けんくらい輝く。

「それ、私にくれへん？」

首を傾けながら聞いてくる女の子に、僕はきっぱり言い放った。

「嫌や。」

「まあ、ケチやね。」

女の子が大げさに驚いているその横で、こうちゃんが僕を見つめる。

「かつちゃん、知り合いか？」

「知らん、こんな子」

僕はそう合図をすると、こうちゃんと二人で思いっきり走って逃げた。走り去りながら、ちらりと振り返ったけど、女の子は追いかけては来んかった。

「何やったんや、今の子。」

「こうちゃんが、不思議そうに聞いてくる。」

「誰かの、親戚ちゃうんか。」

「かもしれない、言われたらどっかで見たかな。でもびっくりしたわ」僕は妹や近所の小さい子らの面倒は無理やり見させられとったけど、同じ年頃の女の子と話す機会はほとんどなかった。話している所を誰かに見られでもしたら、明日は教室でどれだけはやし立てられるか分からへん。僕は汗を拭いながら、一休みした。

あの子可愛かったな、とはこうちゃんの反応を気にしてよう言わんかった。

「ホンマ、そのビー玉好きやねえ。」

次の日。みんなと蝉の音が煩くてちよつと木陰で休んでたら、また昨日の女の子がやってきた。

僕はあわてて周りを見たけど、今は僕以外誰もいない。

「綺麗な色や、海みたいやね。」

「・・・これは地球や。」

「え？」

女の子の言葉に僕は思わず言ってしまった。

「これは地球号なんや。この小っこい玉の中にな、空も海も人もみいんな入ってるんや。」

海の彼方に消えていったお父ちゃんも。

言ってしまったって、僕は赤面した。

今まで、誰にも言ったことはなかったのに。

僕がこのビー玉を大事にしていた訳を。

戦争に行ってしまう前にお父ちゃんが話してくれた事を。だって、それは聞きようによつてはー、

「ニッポンも米国もみいんな、この玉の中か。」

女の子の声に、しもた、と思った。非国民やと言われるから、言わんようにとあれだけお父ちゃんが釘をさしたのに。

おそろおそろ顔を上げると、女の子は向日葵みたいに微笑んでいた。

「そのビー玉、やっぱ綺麗やなあ。」

それは、太陽に向かつて咲いているように。

「・・・やらんからな。」

僕は、再び真っ赤になった。

それからほんの2時間程経った頃やった。

昼ごはんを食べた後、僕とこうちゃんは他の数人の友達と一緒に追いかけて遊ぶことにした。

暑さが限界に達したその時

ドーンという地響きが辺りに伝わり、近くに火柱が見えた。

「国鉄の方やつ」

近くにおった大人が、大声で叫んだ。

たくさんさんの戦闘機が上空を横切った。

うわっと周りがざわめきたち、周りが人でいっぱいになる。

僕は頭がガンガンした。

こんな近い空襲、今までなかったのに。

「こっちゃん……」

僕は振り返った。周りは僕よりも大きい大人ばかりで、みんなどこにいるのか分からない。

その僕の手をぎゅっと掴んだ人がいた。

「なに、ぼおつとしとんの！」

怒鳴りながら、手を握っていたのは彼女だった。

「早よう、逃げな！ 駅から遠くに行くんや」

彼女は東を指差した。

「あっちゃん！」

その際、するりと手は解けて、僕は人波に流されるまま、西へと向かった。

「そっちはアカン、行ったらー」

彼女の声が、かすかに聞こえた。

人々がなぜ西に進んだのか、よく分からなかった。

多分、皆こっちが西だとか、東だとか何も考えられなかったんやと思う。

そして西は ハズレやった。

一面、火の海に囲まれた僕はどことなく冷めた頭で考えていた。

そうか、こっちは兵器工場やもんなあ。

あの子、頭ええなあ……。

僕はぼうつとその場で立ちつくしていた。
焦げ臭い匂いにも、流れ出る汗にも慣れて、目が乾いて仕方なくな
った頃やった。

ふと横を見ると、彼女がいた。

彼女は寂しそうに微笑んだ。

「な……」

なんで、ここにおるんや？

言いたかったけど、喉が痛くて声もでなかった。

「なあ、」

その子はそつと僕の手の平を掴んだ。

「やっぱりこれ、ちようだい？」

そう言つて、僕の手からビー玉を握り締める。

彼女の手は炎の中でも白く、ひんやりとしていた。

すぐ近くにある、彼女の顔があまりに白くて。

黒い瞳は真っ直ぐ僕を見てくれていて。

僕は思わず、頷いた。

ええよ。

君ならあげるよ。

……大事にしとつたけど、しゃーないな。

その代わり。

代わりというのも何なんやけど。

また、会えるやろうか。

君に。

急に目の前が暗くなった。

上をみると、B29が僕の上を通っていた。ばあつと黒い点々を撒

き散らしながら。

僕めがけて、落ちてきよるわ
そんなことを、思った。

ばちりと、何かが感電する音がした。

辺りが真っ白になって、聞こえなくなるほど凄い音が響き渡った。

・・・冷たい。

この焼け野原でそんな感想を抱いたのは僕一人に違いない。

僕は全身ずぶ濡れだった。

足元を見ると真っ二つに割れたビー玉が転がっていた。

あれほど逃げ惑っていた人々は一体どこに消えたのか、その数はまばらで、残っていた数人もぼんやりと空を見上げるばかりだった。

我にかえって横を見たけど、女の子はいなかった。

「かつちゃん。」

大分、時間が経ってから、僕はこうちゃんが手を振りながら走ってくるのを見つけた。

こうちゃんはすっかり泣きはらした目をして僕に向かって走ってきて、僕に抱きついた。

「生きとったか」

「こうちゃんも、生きとる？」

「ああ、生きとる！」

二人で叫んだ。

「僕ら生きとる！！」

ふと、こうちゃんは不思議そうに僕を見た。

「かつちゃん、なんでそんな濡れてるんや？」

後から聞いた話、あの日はこの近辺に700トンもの爆弾が落ちた
ということやった。

そして、1ヶ月

僕は、こうちゃんと廃墟から立ち直りつつある、町を歩いていた。
まさか、あの空襲の次の日に戦争が終わるなんて夢にも思っていな
かった。

僕は、あれからずっと考えていた事をまるで今、急に思い出したか
のような素振りでこうちゃんに聞いてみた。ビー玉を欲しがった女
の子は一体誰だったのかと。

「知らん。」

こうちゃんは素っ気なく言った。

「実は色々考えたんや。あれは幽霊かもしれん、ってな。昔よう遊
んだマツ子ちゃんが病気で死なんかったら、ちょうどあんな感じに
なっとつたんちゃんかな。それかほら、けんちゃん家のお姉さん
も亡くなつたやろ？あとはな。」

言いかけて、僕は止めた。

「やっぱり分からんわ。」

僕らの周りにはいなくなつてもた人が多すぎる。

誰もかれも、僕に断りもなく現れては消えていく。

僕は空を見上げた。

ビー玉よりも青い空が、どこまでも広がっていた。

(後書き)

この物語は大阪の京橋大空襲が舞台になっています。
ちなみに、作中にでてくる国鉄は京橋駅で、兵器工場は今の大阪城
公園です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0422j/>

青いビー玉

2011年10月6日09時43分発行